

序章

「人」が鍵

文化ホール3館を有する小美玉市は、2009年にみのくれが地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞し、アピオス・コスモスにも住民参画による運営が展開されているように、「住民参画による文化のまちづくり」を実践するまちとして全国的に高い評価を受けています。

町村合併効果

みのくれの地域創造大賞受賞のポイントが、審査委員会によって次のように記述されています。

徹底した市民参画によるホール運営を推進。約200名の住民実行委員会が毎年、各種事業計画に携わり、住民劇団・住民楽団を含むボランティア組織の「みのくれ支援隊」約160名が事業を支えるなど、ホール事業を通じたまちづくりの新たな人材育成のあり方を提示した。

町村合併によってみのくれからアピオス・コスモスに広がった、住民参画によるホール運営。ホールの運営や事業推進に数多くの住民が参加・参画し、元気を生み出しています。

特に、他の行政分野で見られない10代〜30代の若者の参加・参画を得ており、3世代が入り混じって創造的な活動を行なっています。ときには企画を生み出し、表現者として舞台に立ち、バックヤードを支え、フロントスタッフとして客を迎え、記者として取材に飛び回り、さらにはホールを飛び出して地域交流を図るなど、文化をまちの隅々まで届けています。館職員はその活動を支え、時には先陣を切って開拓し、新たな住民の参加・参画を促す役目を担っています。

活性化に燃えるアピオス

アピオスは、30年近くに渡って演歌や歌謡曲の歌手を中心に招聘して鑑賞事業を行い、長年「大衆劇場」として役割を果たしてきました。

平成20年度から、活性化のための手法と方針を考える「小川文化センターを活性化する会」(後に小川文化センター活性化委員会へとつながる)を立ち上げ、①愛称募集②オリジナル企画の創造③施設の修復と改善、という3つの活性化の手法と、『共に支え合う自由空間』というミッションを策定しました。

現在は小川文化センター活性化委員会が毎月会議を開き、アピオスの自主事業や運営ルールの改善、全国の事例を参考とした学習や、住民プロデューサーとして必要なスキルを身に付ける研修などを行なっています。

また、国民文化祭演劇祭を支えた住民ボランティアスタッフ中核メンバーと館が連携し、文化ボランティアスタッフ「アピオスばるず」を立ち上げ、住民が支える文化活動の拠点としての体制を整えています。

オリジナル企画にも積極的に取り組んでいます。プロの指導・演出、プロバンドの演奏のもとスターになりきって歌う「スター☆なりきり歌謡ショー」や、大ホール舞台上に仮設客席を設置してこだわりの企画を手作り



公演時にチケットもぎりや座席の案内を行うフロントスタッフボランティア「アピオスばるず」。ばるず(Pais)は、「仲間」という意味。「みんなてアピオスを応援しよう！」という仲間意識をもって、ズレキな笑顔とおもてなしの心を大切に活動している。

で行う「アピオス小劇場」シリーズ、おやじの復権を目指して企画した「おやじバンドコンテスト」を開催し、地域の元気づくりに取り組んでいます。



石川 弥来

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

3館合同で勉強会を続けていこう

今年度の会議では、武田順さん、高田勝則さん、熊倉順子さん、五十嵐靖男さん、栗田弘之さん、の6名のゲストを迎え、それぞれの皆さんの経験豊富な話や熱い想いを聞き感銘を受け、帰りの車の中で、家でメモ書きを読み返しながら知恵熱が出ちやいそうなくらい色々な事を考えました。毎回話しを聞かたびにキーワードが増え、なかなか考えをまとめる事が出来ず非常にややもやした気持ちです。でも、今回の経験を通じ、今までなんとなくぼやっと考えていた小美玉市の将来像を真剣に具体的に考えるきっかけになりました。毎回の会議で自分が感じたキーワードをあげると

- ・単にホールをどう運営するかだけでなく、文化の視点でまちをどう考えていくか
- ・新たな人のつながり、広がりをどう作っていくか
- ・茨城空港や空の駅(構想中)も文化発祥の地と考え、小美玉市は文化ホールが5館ある
- ・文化・芸術は金が掛かるものだが、文化・芸術でお金を稼ぐ事も考えてみる
- ・大切なのはイベントをやることでなく拠点をつくることだ
- ・自分たちだけでやると燃え尽きていくが、外から燃料をもらって燃え続けることが大事なのかも。
- ・もっともっと様々なものをウェルカムしてどんどん多様化していく
- ・ホールという舞台を使って思い出をつくって次の人たちにバトンタッチしていく、「ピオトープ」がいいんだと思っている
- ・時間と空間の共有
- ・もってきた文化は育たない

色々キーワードはありますが、一番つよく思う事は、今回の経験やおもいを限られた人数だけにとどめるのではなく、もっと多くの人と共有しなくてははいけないと思います。

3館の委員、ボランティアスタッフ、そして館を利用している団体の方達、なるべく多くの人と同じ目標「芸術・文化で元気に生きる」を共有し、同じ目標に向かって歩けるよう、まるごと文化ホール計画のこの会議(勉強会)を今年度で終わりにするのではなく、毎年新しく受講生を集め、3館の合同事業として続けていってほしいと強く願います。

全国から注目を集めるみのゝれ

みのゝれは、誕生前の平成8年から住民参画によるホール運営に取り組んで15年。みのゝれが今後どのように成長していくか、アピオス・コスモスにとって一つのモデルになります。

「つどろく・つなく・つくる」をミッションとして掲げ、住民劇団・住民楽団を含む文化ボランティア「みのゝれ支援隊(4部門7組織)」と、事業を企画実行する「各種実行委員会プロジェクトチーム(8組織)」があります。これらの代表や一般公募の住民が参画している「四季文化館企画実行委員会」は、ホールの自主事業の推進や運営ルールの改善について毎月話し合いを持っています。

住民が参加・参画する受け皿は、ミュージカル、器楽、企画プロデュース、広報デザイン、フロントスタッフ、次世代リーダー育成などで、その徹底した住民参画への取り組みは全国的にも先進事例として取り上げられる存在です。

今後は経験やノウハウだけでなく、想いもバトンタッチしながら世代交代と新たな輪の拡大をいかに図っていくか、小美玉3館の将来を左右するモデルケースとして注目を集めています。

周辺環境も

一帯として捉えるコスモス

コスモスは、図書館・史料館・公民館・文化ホールを併設する生涯学習センターとして、各施設と連携して市内全域に生涯学習を発信していく拠点に位置づけられています。

平成20年度に「玉里文化ホールを考える会(後にコスモスプロジェクトへとつながる)」を立ち上げ、①生涯学習の拠点としての特長づくり②住民参画による事業展開③アットホームな身近さ、という提言を行い、文化ホールのみならず、コスモス全体・しみじみの家・民家園まで含む敷地全域をコスモスプロジェクトのフィールドとして捉え、周辺環境も含めて元気づくりに取り組んでいます。

コスモスプロジェクトの具体的な活動としては、フィールド内あちらこちらの場所に企画する「C.C.C(こすもす・きゃんぱす・こんさあーと)」、「コスモスを拠点に活動するサークルを積極的につなぐ「サークル交流会」、若い母親を対象にした学び体験の機会を企画する「コスモスカフェ with wine」、さらに現在はコスモスのロゴデザインを筑波大学と連携して取り組むプロジェクトも進行しており、勢いのある活動展開をしています。

なかながいいセンりんじやん

小美玉市まるごと文化ホール計画を策定するプロジェクトチームは、3館で活躍する住民リーダー12名。コディネーターに筑波大学大学院教授の蓮見孝先生を迎え、2年の活動期間の中でワークショップを通じて将来像を共有したり、シンポジウムを開催してたくさんの人たちと「文化のまちづくり」について考えたり、「持続可能な仕掛け

づくり」や「文化と商工観光の連携」、「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」について学びました。これらの活動を通じてプロジェクトチームが自己分析した結果は、「小美玉3館、なかながいいセンりんじやん！」。では、この『なかながいいセン』をどうやって持続させられるか、そこが鍵だねという話になりました。

人をいかに育てるか

蓮見先生やゲスト講師の皆さんから学んだことや、プロジェクトチームでワークショップを通じて共感しあった想いの共通点は「人」でした。人がまちを元気にし、文化を育み、誇りを生む。この地に住む人たちの郷土愛が深まり、子どもたちがこのまちに住み続け、あるいは魅力を感じた人が移り住む。まちの未来を握る鍵となるのは、いつの時代も「人」なのだということに気づきました。

「結局は人の問題だよな」「ここはいい人材に恵まれてますね。それに比べてうちの市は…」他の自治体から視察に来られる住民や職員の方々が口を揃えて言う言葉です。ここで言う「人」とは、次世代を担う若者やリーダー、館職員のことを指します。小美玉のいまの魅力は「人」が支えているのです。では、その「人」をいかに育成し、持続可能な文化のまちづくりを実現するか。まるごと文化ホール計画の大きな柱になりました。



【小美玉市まるごと文化ホール計画シンポジウム】
 よりたくさんの人たちに「文化をまちづくりにどう活かしていくか」
 を考えてもらおうと「文化のまちづくり」を考えて開催。

小美玉市まるごと文化ホールの基本的な考え方

- 1 アピオス・みの〜れ・コスモスを中心核とし、3館の個性・独自性を磨いて伸ばしながら、それぞれ担う部分と連携して行なっていくところを明快にしていきます。
- 2 地域コミュニティセンターや空の駅、商業施設、田んぼの中など、小美玉全体を活動エリアとして捉え、3館から発信していきます。
- 3 祭りや食文化などもまるごと“文化”として捉え、コラボレートしていきます。



植田康雄

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

郷土に愛着と誇りを

1 自主的なまちづくり活動の推進に向けて

まるごと文化ホールプロジェクトチームに所属し2カ年研修を積んだ。その中で、特に印象的なものは、ワークショップである。参加者が創造的で、生き生きとしたアイデアを生み出していた。グループでの話し合いや作業を通して、自由に意見を出し合うことで、お互いの理解を深め、認め合うことができた。

この経験を生かし、地域における自主的なまちづくり活動のサポートをしたい。

2 文化のまちづくり

私は、生涯学習センター「コスモス」を年間通して利用している。当センターには、文化的遺産、風土を生かしながら、優れた芸術文化を身近で鑑賞できるようにし、地域文化を育てる拠点として、その機能を発揮してもらいたい。そのために、次の点をお願いしたい。

- ①併設されている史料館や図書館の施設の持つ機能を十分発揮させる。
- ②市民が、積極的に参画できる取り組みをさらに工夫する。
- ③子どもたちの文化・芸術活動への積極的参加促進と意識を高揚させる。
- ④文化・芸術活動を通して、地域コミュニティの活性化を図る。
- ⑤「しみじみの家」や「民家園」など、周辺の施設との連携を考慮した工夫を凝らせば、もっと大勢の市民が散策に訪れる。
- ⑥施設・設備の使用率を向上させるために、利用料金等の見直しをする。

そこを訪れると新鮮な情報や発見があったり、心の安らぎを覚えたり、何かを学んだりする施設であってほしい。

3 郷土を愛する

自分の住む町が一番だと、郷土に対して強い愛着心や誇りをもてる人々を一人でも増やすことが重要である。老後も住み続けたいと願う町とは、どのようなものか。それは、生活するのに便利なおうえ、治安も良く、仲の良い近所付き合いや人情のぬくもりが感じられる場所、すなわち「安全・安心」な場所だと思う。

「文化」だけの視点で町づくりを見るのではなく、「安全」「観光」「福祉」「教育」などの施策と連動させながら進めることをお願いしたい。郷土に執着心を持ち、何十年も先を見て取り組めば、より独創的なビジョンも生まれてくると思う。高くスローガンを掲げ、姿勢を見せることで市民の意識に変化が生まれるはずだ。



内田 保

小美玉市まるごと文化ホール計画
策定プロジェクトチーム

特效薬はない。動いていくことだ。

まるごと文化ホールプロジェクトチームの目的は、小美玉市にある3館をこれから将来にわたって、負の遺産にならないようにどのように使っていくかと、当初私は思っていました。しかし、何回もの会議(研修?)や委員のみなさんの意見を伺っているうちに、これは少し考え違いをしていたと思いました。本当は、この小美玉を文化の街にするために、当市にある三つの文化ホールは何ができるのか、だったんだと気づいたんです。プロジェクトチームでは、様々な事例や委員のみなさんの意見等を聞き、それぞれの素晴らしい考え方に一々納得しました。でも、そのためにはこうするんだ、という特效薬はなかなかありません。たくさんの意見や考え方が出ましたので、それに基づいて常に何かしら行なっていく、停滞しないように動いていく、ということが重要かと思っています。

さてここで、私個人的な考えを一つだけ書きます。シンポジウムの時に、市長が言った「文化は芸術文化だけでなく、食文化や農文化などもある」という言葉が、やけに心に残っているんです。文化ホールで、異文化交流のような催しができる面白いかもしれませぬ。



コスモスを拠点に活動している「演劇Crew Cosmo's」